

八田利也のメディア戦略と主要論稿の特質について
1970年代を中心とした日本の建築批評の展開過程に関する研究・その2
Hattariya's Media Strategy and the Characteristics of His Major Manuscripts
A Study on the Development Process of Japanese Architectural Criticism in the 1970s, Part 2

吉村凌¹, ○田所辰之助²
 Ryo Yoshimura¹, *Shinnosuke Tadokoro²

Abstract: This study is concerned with the individual theme of tracing the development of an original architectural thought within the genealogy of Japanese architectural criticism centering on the 1970s by analyzing the philosophy that permeates Hattariya (1958-1961) series of efforts and its influence on the architectural thought of the time. As a part of this analysis, this paper clarifies Toshiya Hatta's philosophical foundation by focusing on his essay published in "Modern Architecture Folly Theory" (Modern Architectural Follies) (1961). Hattariya's philosophical foundation was formed mainly by the following two points: 1) The means of consensus between the architect and society is possible only by constructing a formative work that overwhelms others; 2) The architect's discourse is an auxiliary tool for the architect's position to be dominant in the media, and the relationship between the discourse and the architecture is not good if the discourse and the architecture are divergent. The relationship between the discourse and architecture can be divergent. The articles contributed to the journal incorporated devices to make their arguments stronger in the media by using provocative documents and expressions that incite the reader, while citing historical architecture.

1. はじめに

本研究は、八田利也(1958-1961)の一連の取り組みに通底する建築理念を析出し、当時の建築思潮への影響を解析することで、1970年代を中心とした日本の建築批評の系譜のなかで独自の活動が展開された経緯を跡付けることを目的としている。本稿では、その一端として、『現代建築愚作論』(1961年) [Figure 1] に掲載された論稿に着目することで、八田利也の活動の理念的基盤を明らかにする。

八田利也は、伊藤ていじ(1921-2010)、川上秀光(1929-2011)、磯崎新(1931-)の3人により結成され、雑誌に論稿を寄稿する際のペンネームとして使用されていた(後の伊藤の発言から二川幸夫(1932-2013)もコアメンバーであったことが確認できる^[1])。各論稿の内容は3人の意見が反映されたものであるが、川上が調査、伊藤が執筆、磯崎が見出しと挿絵を担当しており、役割は明確に分かれている。

2. 主要論稿について

八田利也は、1958年から1961年の3年間のなかで、10点の論稿を雑誌に寄稿している。[Table 1]

論稿の見出しは、刺激性が高い文章が多く、読者を扇動するような表現が多く使われている。その一部は以下のとおりである。

* 施主は頑迷不遜である

* 建築家たちは、都市混乱の癌細胞をうえつけるのに精力的

な活動をしている

* 建築家諸君。姫路民衆駅を出たら真正面にそびえたつ天守閣をみたまえ

* 建築家諸君！あなた方は愚作をつくったおぼえはないか

Table 1. 八田利也の論題一覧

(1958年～1961年の雑誌掲載論考および刊行物より)	
1958	「小住宅ばんざい」「小住宅設計の未来像」「都市再開発は建築家に市場を与えるか」「ばんざい始末記」
1959	「都市の混乱を助長し破局に至るを待て」「伝統論の系譜と哲学」
1960	「現代建築家気質」「近代愚作論」「都市のアメニティを確保するために」
1961	「巨匠への道」

八田利也=はったりや、ハッター屋^[2]、という名前も、読者を驚かせ、引き付け、その気にさせると言わんばかりの意気込みが読み取れる。また、匿名であることから、メディアや読者が想像を膨らますことができるし、八田利也の思想がより一層の強度を持つ仕掛けが組み込まれていることが分かる。自分たちのプロパガンダを、メディアのなかに効率良く流し込み、巧みに利用しようとする戦略があることを示唆している。

3. 「都市の混乱を助長し破局に到るを待て」(1959年)

後に、磯崎が「フラストが共通項だった」^[3]、伊藤が「この4人は建築と都市という点では一本につながっている」^[4]と述べているように、八田利也の問題意識のベクトルは、社会と建築との関係性に向いている。

1：清水建設株式会社 設計本部 2：日大理工・教員・建築

論稿「都市の混乱を助長し破局に到るを待て」(1959年)では、「クライアントにペコペコしなければならない身分」^[5]から脱することが建築家の目指すべき立場であると指摘し、資本家や都市計画全般を敵対視し、建築家を反体制側の勢力として組織化することで、建築家のテリトリーを限定することの必要性が主張されている。

社会における建築の在り方と、建築家の存在意義の改変を目指し、それをプロパガンダとしてメディアに流し込むことが目的であったことを示唆している。

4. 「近代愚作論」(1960年)

この主張の強度を、より一層、強く補強する為に、論稿のなかで、歴史的建造物の事例が頻繁に紹介されている。論稿「近代愚策論」(1960年)では、ヨーロッパの都市計画が名建築を中心に形づくられていることを引き合いに、次のように述べている。

「巨匠とは傑作をもって都市計画を支配するものである。記念造営物というような建築外の権威と精神の中で存在を主張するのではなく、建築造型のすばらしさで、明日の都市計画を支配できるものこそ巨匠の名にふさわしい。」^[6]

また、歴史的な建築の中から特定のジャンルの建築を取り上げ、一例として、ファンズワース邸について、以下のように述べている。

「施主にとっては、この住宅は訴訟に持ち込むほど住みにくかったらしい。(中略)金を浪費したぜいたくな悪作かもしれない。(中略)しかし、住居のデザインを自分のプリンシプルを突きつめながらぎりぎりここまで達したときに、ローエのファンズワース邸のように一步もひけずに裁判沙汰の中で醜体が晒される。その時にこそ傑作は生まれるのである。」^[7]

そのほかに、法隆寺五重塔や姫路城天守、セントロソユーズなどが紹介され、構造やプランに欠陥がありながらも、時代の枠組みを超えることのできた建築を高く評価している [Figure 2]。それらを「愚作」と措定し、建築家と社会とのコンセンサスの手段が、他を圧倒する造形作品を構築することによってのみ可能であるかのように思わせる論理が組み立てられている。

5. 「現代建築家気質」(1960年)

また、論稿「現代建築家気質」(1960年)では、以下のように述べている。

「真宗のさる高名な上人が「南無阿弥陀仏」といえば衆生は救われるとって人々をひきつけたように、彼(=建築家)に必要なのは都市の未来に対する詳細な分析とか都市存在の技術手段に関する知識ではなくして、南無阿弥陀仏に相当する哲学=装置だけである。」^[8]

「市民に対して語りかける言葉はむつかしい方がよい。言葉はわかりにくいほど民は彼(=建築家)にアカデミックな権威を感じる。」^[9]

「愚作」をつくるために、建築家は大衆から遠く離れた孤高の存在である必要性が述べられている。八田利也にとって、建築家の言説は、メディアのなかで建築家の立ち位置を優位にするための補助的な道具であり、言説と建築との乖離を良しとする理念を読み取ることができる。



左: Figure 1. 『現代建築愚作論』(1961年)の表紙

右: Figure 2. 「近代愚作論」『建築文化』1960年、196号

6. おわり

以上、八田利也の主要論稿について概観した。八田利也の活動の理念的基盤は、主に次の2つで形成されていた。1) 建築家と社会とのコンセンサスの手段が、他を圧倒する造形作品を構築することによってのみ可能である。2) 建築家の言説は、メディアのなかで建築家の立ち位置を優位にするための補助的な道具であって、言説と建築との関係が乖離していても良い。雑誌に寄稿された論稿では、歴史的な建築物を引き合いに出しながら、刺激的な言い回しや読者を扇動するような表現を用いることで、自分たちの主張がメディアのなかでより一層の強度を持つ仕掛けが組み込まれていた。

コアメンバーの4人(伊藤、川上、磯崎、二川)は、1960年代以降の日本の建築批評のなかで、それぞれ、建築史学、都市計画学、デザイン、メディアにおいて影響力をもち、八田利也の批評性、その理念がその後の建築思潮に広がっていった可能性を指摘できる。また、その扇動的な取り組みは、逆説的に戦後日本の近代建築が直面した時代状況を際立たせ、象徴していた。

7. 参考文献, 注釈

- [1] 伊藤ていじ「めぐりあい:語り合い“吹き”まくり…」『毎日新聞』毎日新聞社、1981年7月24日夕刊、pp.772/[2] 論稿のなかで読み方は定めされていない。/[3] 磯崎新『挽歌集』白水社、2014年、pp.178/[4] [1]同、pp.772/[5]八田利也『現代建築愚作論』彰国社、1961年、pp.104/[6] [5]同、pp.184/[7] [5]同、pp.192/[8] [5]同、pp.12/[9] [5]同、pp.13